

## 夏の到来を告げる風物詩

# 札幌まつり

昔から、市民の暮らしとともにあり、今も親しまれている札幌まつりの足跡をたどります。

札幌神社（北海道神宮）の例祭が六月十五日に決まったのが明治五年（一八七二年）です。しかし、その年の札幌まつりは、幣帛（へいはく）（神に奉獻するものの総称）の到着が遅れたため、七月七日、岩村判官参列のもとに執り行われました。これが、札幌まつりの始まりです。十年（一八七七年）には、札幌の人々から神幸（しんこう）を願う声が起き、翌年に神輿（みこし）が巡行したのが、札幌まつり渡御の始まりです。最初の神輿は、札幌の宮大工二人で作り上げた白木の立派なもので、これを魚商と消防組が担ぎました。

この時、渡御に薄野の芸妓（げいぎ）や鳴り物の社中を、二台の踊り舞台に乗せて繰り出したのが、山車（だし）の始まりです。二十年（一八八七年）の渡御には、牛数頭に引かれた「狸々が瓶より酒を酌む像」を飾りつけた三丈（五・四尺）余りの大きさの山車が練り歩き

ました。祭りといえば、大人から子どもまで人気があったのが、見せ物小屋。二十五年（一八九二年）に、木暮サーカスがトラを見せたのが初めてです。三十二年（一八九九年）に、見せ物小屋は、創成川西側の南一西一から三条橋まで出すことが許され、創成川河畔に並ぶようになりました。

しかし、この見せ物小屋も、昭和三十四年に起き



南1条通りの札幌まつりの様子（明治40年）  
（札幌市教育委員会文化資料室所蔵）



東宝公衆前を行く山車（昭和39年）札幌神社として最後のまつり。  
この年の9月に北海道神宮と改称（札幌市教育委員会文化資料室所蔵）

た火事を機に、中島公園へと場所を移します。

この火事は、定員を超えたサーカス小屋から突然火が吹き、逃げ惑う人とやじ馬で、五十人以上の重軽傷者を出す惨事となりました。

またこのとき、出番のため鎖をはずされていたゾウが、創成川を渡って人家に飛び込む一幕もありました。四十五年には、地下鉄工事のため、見せ物小屋は坂下グラウンドで店開きをしたこともありま

す。  
しかし、この見せ物小屋も近代化の波に押しされ、最近ではサーカスもなく、「お化け屋敷」の小屋が面影を残している程度です。

このように、様相を変えた札幌まつりですが、現在でも中島公園では、露店が所狭しと立ち並び、たくさん市民でにぎわっています。

一世紀以上の歴史を刻んだ札幌まつり。これから初夏の風物詩として、市民に親しまれていくことでしょう。

（平成十四年六月号・第八三回）